

## 取組実績の概要（2 ページ以内）

## 【事業の目標】

東京薬科大学は、学生第一主義を掲げ、薬学・生命科学分野における知識・技能・態度を修得し、主体的・協働的な活動を通じて、21世紀のグローバル社会において、高度複雑化する課題を発見・解決する薬剤師や研究者・技術者の養成を教育目標としている。この目標を実現するため、長年にわたり教学改革に取り組み、その結果として、本学の就職希望者の就職率は、この5年間に於いて99%以上を維持している。その一方で、強い研究心を有した薬剤師・研究者・技術者養成を教育目標とした両学部において、その重要性が再認識されている、卒業論文研究の評価方法が十分に開発されていない、そして、その学修成果が目に見える形で社会に提示されていないという問題点を抱えていた。また、ディプロマ・ポリシーに基づいた科目ごとの達成目標や評価方針についても、教員・学生において共有出来ていなかった。本取組は、薬学と生命科学の分野の特徴を踏まえた上で、卒業論文研究の新たな質的評価法とそのフィードバック法の開発、ディプロマ・ポリシーを実現するための「卒業コンピテンス・コンピテンシー」を明示したカリキュラムの体系化・視覚化、そしてその評価・設計に教学IR(卒業生調査・在学生調査)を活用することを主軸として実施したものである。さらに、教学IRにおいて明らかになった知見や課題は、FD・SD活動やカリキュラム改革を通じ、教育プログラムにフィードバックするというPDCAサイクルを確立することにより、薬学・生命科学分野の新たな教育モデルを提示し、さらに日本の理系教育の特徴である卒業論文研究が、教育の質保証向上に果たす重要性を、社会に提示することを目標とした。

## 【事業の概要】

この目標を達成するため、本取組は、次の4つを骨子として構成した。

## 1. 卒業コンピテンス・コンピテンシー導入によるアウトカム重視教育と評価

卒業コンピテンス・コンピテンシーを、薬学部においては平成30年度に導入、生命科学部においては令和元年度から導入した。卒業コンピテンスは「学則及びディプロマ・ポリシー等を踏まえ、本学卒業生が身に付けるべき知識、技能、態度を包含する実践力」、卒業コンピテンシーは「卒業コンピテンスを具体化し、知識の応用や実践力のレベルに応じて科目と結び付けて観察可能な能力」とそれぞれ定義される。

これは、薬学部教務委員会、生命科学部教務委員会、AP実行委員会が試案を策定し、教授会における議論に基づいた合意形成の上で導入された。薬学部においては、試験導入した卒業コンピテンス・コンピテンシーを卒業生調査の分析結果により評価を行い、本格導入した。また、生命科学部においては、ディプロマ・ポリシーに基づき卒業コンピテンス・コンピテンシーを策定した上で、卒業生調査により評価を行い、さらに判明した課題については令和2年度から導入する新カリキュラムに反映した。学生に対しては、ガイダンスやシラバス掲載を通じて、教職員に対しては、教授会やFD・SDを利用し、周知徹底を行った。卒業コンピテンス・コンピテンシーの導入により、ディプロマ・ポリシーと科目との連動によるアウトカムを重視した教育と評価を実施することが可能となった。

## 2. 教育の質向上を目的とした研修（FD・SD）の実施、

本取組に対して、全教職員が共通の認識を有することを目標として、教育の質保証や学修成果をテーマとしたFD・SDを実施した。また、本取組で実施した、卒業生調査や在学生調査の結果、判明した知見についても、FD・SDで取り上げている。研修内容は、「変化する環境と大学の教学改革～三つのポリシー等のキーワードから考える～」、「教育の質保証と大学構成員の役割」、「教育の質保証を担う大学職員の役割」等を実施した。平成28年度87.9%、平成29年度87.5%、平成30年度79.0%、令和元年度32.2%（新型コロナウイルスにより全学FD・SD活動が中止となった為）の参加率となった。また、教授会、年度初めの学長発信においても、本取組の周知徹底をしている。

## 3. 成績評価に係る教員評価の導入

卒業時の質保証のためには、個々の授業科目が卒業コンピテンス・コンピテンシーのどの部分を担うのかを担当教職員が認識し、大学全体が組織的に教育を展開することが重要である。また、卒業論文研究にルーブリックを用いた上で評価を行うことも担保する必要がある。このことから、令和元年度より新たな教員評価を導入し、「卒業コンピテンス・コンピテンシー遵守」と「卒業論文研究ルーブリックの実施」を、評価における加点対象として、本取組に規範性を持たせた。また、学部・学科毎に上長によるレビューを行うこととして、卒業時の質保証を実質化した。

## 4. 卒業論文研究を活用したディプロマ・サプリメントの作成

理系教育プログラムにおいて、学生の学びの集大成ともいえる、卒業論文研究に対しても、ディプロマ・ポリシー及び卒業コンピテンス・コンピテンシーに基づいたルーブリックを設計し全学的に導入した。卒業論文研究の評価方法は、これまで本学の教育プログラムにおける課題の一つであったが、学部ごとに統一した評価基準を設けることにより、令和元年度には全ての学生に対して卒業論文研究のルーブリックの自己評価または他己評価を実施した。これは、試験導入において、学生・教員の意見を聴取し、導入されたものである。以上の取組により、卒業論文研究における達成目標や評価基準が明確化され、学生はルーブリックに基づいて目標を定めると共に、教員においてもルーブリックに基づいた指導を行うことができた。令和元年度には、卒業論文研究を実施する者すべてに対して、eポートフォリオを利用して実施し、少なくとも1回は自己評価または他己評価を行った（薬学部においては教員が評価を行い、生命科学部においては自己評価に基づき教員が学生と面談を実施する形式とした）。また、その成果を学生にフィードバックすると同時に社会に向けて発信する取組として、卒業論文研究ルーブリックを基盤としたディプロマ・サプリメントを発行した（対象学生に対するルーブリック評価実施率100%、ディプロマ・サプリメント作成率および開示率100%）。ディプロマ・サプリメントには、卒業論文研究のルーブリック評価の他に、学会発表、実験・研究技能等を記載した。ディプロマ・サプリメントは、学生は在籍期間中については、両学部がそれぞれ設置しているLMSから、自由にダウンロードすることを可能として、さらに、卒業後は大学に発行を求めることが出来る。

### 5. その他の取組

本取組においては、大規模卒業生調査を実施し、本学の教育プログラムの評価に活用した。卒業生調査は、①本学における学修経験と卒業後のキャリア形成との関係、②卒業論文研究の効用、③本学の教育において身につけた能力および社会において必要と感ずる能力を明らかにすることに焦点を置かれ設計され、回収数5,083件、回収率28.6%となった。この調査の分析により、本学の教育プログラムの評価を行い、教学改革に活用すると同時に、FD・SD事業において共有されている。

#### 【改革の加速と今後の大学】

本取組により、東京薬科大学における卒業時の質保証は強化され、教学改革は加速した。更に、持続可能なPDCAサイクルを確立したことにより、今後も、学生には勉強しがいのある大学、教職員には働きがいのある大学を目指し、最終的に、社会から必要とされる人材を輩出するために、本学の教学改革を継続していく。

#### 【必須指標の達成度】

	平成28年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
学生の成績評価（薬学部） [総合薬学演習試験、A,B評価を合わせた学生の割合]	56.5%	64.0%	62.8%
学生の成績評価（生命科学部）[GPA平均]	2.39	2.30	2.36
学生の授業外学修時間（薬学部） [時間数(1週間当たり(時間))]	13.0時間	19.0時間	13.4時間
学生の授業外学修時間（生命科学部） [時間数(1週間当たり(時間))]	8.2時間	12.0時間	7.6時間
進路決定の割合 [% (就職決定者数+進学者数) / 卒業者数]	99.5%	99.0%	99.5%
事業計画に参画する教員の割合 [% (参画教員数/在籍教員数)]	12.1%	25.0%	25.0%
質保証に関するFD・SDの参加率 [% (参加教職員数/在籍教職員数)]	87.9%	90.0%	32.2%*
卒業生追跡調査の実施率（年度別卒業生） [% (調査回答者数/卒業者数) ]	95.6%	99.0%	78.9%
卒業生追跡調査の実施率（累計卒業生） [% (調査回答者数/卒業者数) ]	0.3%	3.1%	12.3%

※令和元年度は新型コロナウイルスにより全学FD・SD活動が中止となった為、FDワークショップ参加率を記載。